論　文

MLA 連携〔論〕は学部学生の新たな調査研究メソッドになるだろうか？

――ミュージアムの中のライブラリ＆アーカイブで構想した〈MLA 連携〉から大学の教育現場で提案する新たなリサーチ・メソッドとしての〈SLA 連携〉へ

水谷長志

1．はじめに―本稿の由来と成立ち

1.1　MLA 連携〔論〕とは

人文学諸学の研究者においては、謂ゆる MLA あるいは MLA 連携、およびその連携論は、まだ認知度の低い用語であろうが、M: Museum, L: Library, A: Archive の現場関係者および博物館学、図書館情報学、アーカイブズ学に携わる者にとっては、すでに耳にも馴染んだ用語であるとともに、共通の課題として認識されているものである（以下、〔論〕も含んで MLA 連携として総称し記載する）。それは例えば、2013 年刊行の『図書館情報学用語辞典』第 4 版に「MLA 連携」が項目として採られて、以下のように記されていることからも推察できよう[(1)]。

> 博物館（Museum），図書館（Library），文書館（Archives）の間で行われる種々の連携・協力活動．2008 年，IFLA[(2)] と OCLC[(3)] から MLA 連携についての報告書が出されたのを契機に関心が高まっている．日本でも博物館，図書館，文書館は元来，文化的，歴史的な情報資源の収集・保存・提供を行う同一の組織であったものが，資料の特性や扱い方の違いに応じて機能分化した一方で，施設の融合や組織間協力を続けてきた．近年，ネットワークを通した情報提供の伸展に伴い，利用者が各機関の違いを意識しなくなりつつあることを踏まえ，組織の枠組みを超え，資料をデジタル化してネットワーク上で統合的に情報提供を行うための連携・協力などがなされている．

あるいは学芸員資格課程においての必修科目である博物館情報・メディア論の新たなテキストとなるべく 2017 年に創刊された「博物館情報学シリーズ」の初巻である『ミュージアムの情報資源と目録・カタログ』（同年刊）において、企画編集委員を代表する水嶋英治が、担当の 1 章「博物館情報学の三大原則」の冒頭において、「ミュージアム・ライブラリ・アーカイブズ（MLA）の世界にも情報革命が浸

透しているのは万人周知の事実である」と書き、博物館情報学の研究領域の「組織—制度系」の内容の筆頭に、MLA 連携を挙げていることなども証左の一つとなるだろう[4]。

日本アーカイブズ学会[5]あるいはデジタルアーカイブ学会[6]においても MLA 連携に視座を向けた諸論考の発表があり、また 2011 年の 3.11 の災後に、いち早く連携の活動を始めた saveMLAK もまた見逃せないものである[7]。

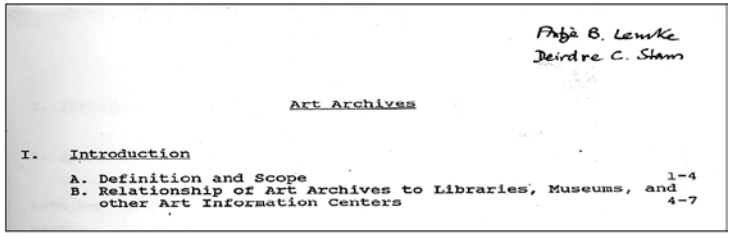
1.2　MLA 連携の萌芽とその展開

1.2.1　MLA 連携の萌芽—連携のトライアングル・イメージの成立に関わる私的由来：アート・アーカイブからの始まり

いささか過去へ遡るが、筆者が、MLA が繋がり、連携することの要に、アート・アーカイブが存在することを知った契機は、1988 年の夏、シドニーでの国際図書館連盟（IFLA）年次世界大会の美術図書館分科会におけるレムケ名誉教授（Antje B. Lemke, Professor Emeritus of Syracuse University, NY, USA）の“Art Archives: A Common Concern of Archivists, Librarians and Museum Professionals”という基調講演であった[8]。

この講演タイトルの中において、すでに MLA 連携の萌芽を見て取れるのであるが、その 2 年後の 1990 年、レムケ教授が奉職された大学を訪問した折のこと、講義で使用のテキストのそのイントロダクションにおいて一層明確に、MLA 連携のことが、“Relationship of Art Archives to Libraries, Museums, and other Art Information Centers”と記されていた（図 1）[9]。ここに MLA 連携の基本と連携の要となるアート・アーカイブの概念的理解を得たことになるのだが、それは筆者自身の MLA 連携「観」の深化にとって大きなインスピレーションとなったことを、

図 1：アート・アーカイブの理念との遭遇


Antje B. Lemke
Deirdre C. Stam

Art Archives

I. Introduction

A. Definition and Scope 1-4
B. Relationship of Art Archives to Libraries, Museums, and other Art Information Centers 4-7

Relationship of Art Archives to Libraries, Museums, and other Art Information Centers

注の 9）を参照のこと

図 2：アート・アーカイブの実体との遭遇

Jan. to Feb. 1990, US government invited the author to US art libraries, 26 Feb., 1990, MoMA, NY, Library & Archives Director, Clive Phillpot & Picasso's illustrated letter to the 1st Director of the museum

ここに明記しておきたい。

同じ 1990 年の旅の途上において、ニューヨーク近代美術館（MoMA）を訪問し、シドニー大会に先立つ、1986 年の IFLA 東京大会以来の知己であった、MoMA ライブラリ＆アーカイブのディレクターであったフィルポット氏（Clive Phillpot）が私に披露されたのが、パブロ・ピカソが MoMA 初代館長のバー Jr.（Alfred Barr Jr.）に宛てた絵手紙であった（図 2）。まさにアート・アーカイブそのものであり、さらに膨大かつ多彩なアーティストの手稿、日記を始めとする MoMA のアーカイブが持つアート・アーカイブのリアルな実体にようやく遭遇対面したのであった[(10)]。

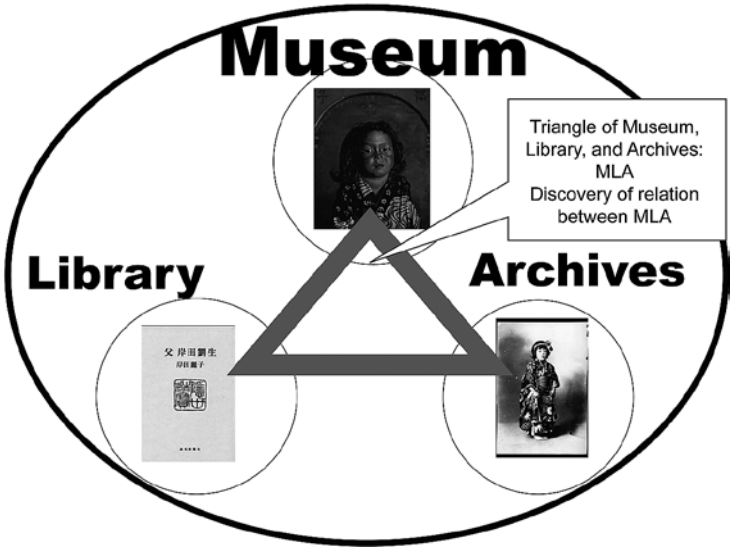
この 2 つの貴重な体験を持って帰国した筆者の専門職能のタスクとして待っていたのが、日本近代洋画史において最も重要かつ多面性を持つ画家岸田劉生のアーカイブの寄贈であり、本格的な整理業務の遂行であった[(11)]。その業務実践を通して、MLA 連携のトライアングルの図が描かれていったのである（図 3－4）[(12)]。

1.2.2　アート・ドキュメンテーション学会が世に問うた MLA 連携

以上のトライアングルの図をもって、国立国会図書館で 1994 年、東京国立博物館で 2009 年に大規模な MLA 連携に関わるシンポジウムをアート・ドキュメンテーション学会（JADS: Japan Art Documentation Society）は企画開催した（図 5－6）[(13)]。

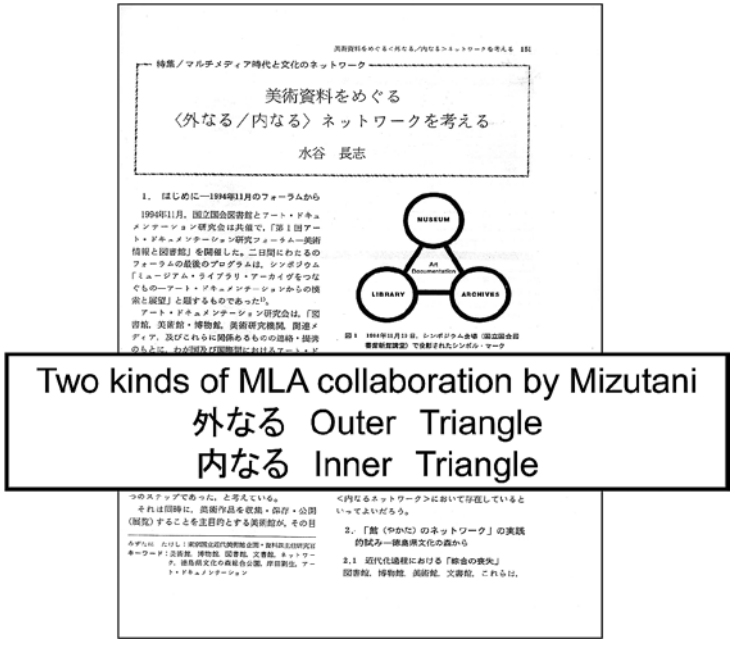
1994 年においては、MLA 連携は、正直なところ十分な理解と共感が得られたとは言い難いのであるが、2009 年においては、状況は大きく変わり、MLA のいずれの世界においても、MLA 連携をともに共有することへの理解と共感が進んでいた。

図 3：MLA 連携のトライアングル・イメージ



M：岸田劉生画《麗子五歳之像》/ L：岸田麗子著『父 岸田劉生』1962（初版）/ A：写真《麗子五歳》

図 4：2 つの MLA 連携①



注の 12）を参照のこと

図 5：1994.11.19「ミュージアム・ライブラリ・アーカイヴをつなぐもの」

右から：筆者、高階秀爾（国立西洋美術館長）・上田修一（慶応大学）・安澤秀一（駿河台大学）
注の 13），17）を参照のこと

図 6：2009.12.4「MLA 連携の現状、課題、そして将来」

右から：筆者、長尾真（国立国会図書館長）・佐々木丞平（京都国立博物館長）・高山正也（国立公文書館長）
注の 13），17）を参照のこと

図7：2つのMLA連携②

Two kinds of MLA Collaboration from USA by James Michalko, Vice President, RLG/OCLC, 2009.11.18

これは日本のみならず、世界的な潮流であったことは、例えば、同時期にアメリカのOCLCと肩を並べていたRLG（Research Libraries Group）の副代表であるミハルコ氏（James Michalko）が、図4と同じようにMLA連携の二面性から2つのトライアングルを描いていたこと（図7）、そしてすでにヨーロッパにおいてはEuropeana[14]の萌芽的研究が始まっていたことからも容易に分かることなのである。

2020年の今日においては、MLA連携とは、ミュージアムとライブラリとアーカイブが、その機能と館種の違いを乗り越えて、文化資源全般にわたる多様性を踏まえての資料と情報の共有を目指すものであることは、いよいよ自明なことになっており、ヨーロッパのEuropeana、アメリカのDPLA[15]、そしていよいよ本年、日本版Europeanaともいうべき国立国会図書館がオペレイトするJapan Search[16]は、MLAの多様な機関が公開するメタデータとデジタルコンテンツ、すでに無数に存在していて、その所在がユーザには不可視になりつつあるデジタルアーカイブを統合的に検索閲覧することを可能にするシステムとして正式の公開を待つばかりなのである。そして、日本においても、MLAが個々に開発してきたデジタルアーカイブのコンテンツは、その出自に関わらずに、情報要求者であるユーザに必要な情報とコンテンツへのアクセス可能性を開くということになるであろう。

1.3　MLA連携の関連文献史を展望する

上述のJADSによるシンポジウムは、初回の1990年は「ミュージアム・ライブラリ・アーカイヴをつなぐもの」、次回の2009年は「これからのMLA連携に向けて」をメイン題目として開催され、開催時、最もこの主題について語り得る識者を招いて、鼎談の形式を取った（図5－6）。後者については、その全貌は、『MLA連携の現状・課題・将来』として2010年に公刊されているのであるが、本書に関する書評も、異なる3学会の刊行誌において3者によるレビューを得ている[17]。同

年から 2011 年においては、さらに次の 3 書が、同じく MLA 連携に関わる書籍として刊行された。

1］ 日本図書館情報学会研究委員会編『図書館・博物館・文書館の連携』（シリーズ・図書館情報学のフロンティア No.10）勉誠出版，2010.10，186p.

2］ 石川徹也，根本彰，吉見俊哉編『つながる図書館・博物館・文書館　デジタル化時代の知の基盤づくりへ』東京大学出版会，2011.5，272,8p.

3］ NPO 知的資源イニシアティブ編著『デジタル文化資源の活用　地域の記憶とアーカイブ』勉誠出版，2011.7，233p.

あらためて、2010－11 年が日本における MLA 連携に関わる議論の沸騰期であった、と言っても良いだろう。

同じく 2011 年には、筆者はこの 3 書を並べての書評を『日本図書館情報学会誌』に[18]、〈研究文献レビュー〉として「MLA 連携―アート・ドキュメンテーションからのアプローチ」を国立国会図書館の『カレントアウェアネス』に寄稿しており[19]、これらの議論の整理を目的としてさらに、『情報の科学と技術』および『美術フォーラム 21』（2017）においても論考を寄せている[20]。

1.4 ミュージアムの中のライブラリ & アーカイブで構想した〈MLA 連携〉から大学の教育現場で提案する新たなリサーチ・メソッドとしての〈MLA 連携〉へ

2018 年 3 月末日をもって東京国立近代美術館の職を辞して、本学へ異動してからは、従前の MLA 連携から、大学の教育現場で実効性を持つ新たなリサーチ・メソッドとしての MLA 連携を模索し、2018 年 11 月のアート・ドキュメンテーション学会秋季研究集会、2019 年 6 月の本学文学部 FD ワークショップ、および同年 12 月の韓国での国際シンポジウムにおいても関連のプレゼンテーションを行った。個々の口頭発表の題目等詳細は、注に回すが[21]、本稿は、これらの発表のまとめであると言える。

2. 博物館情報・メディア論および図書館基礎特論における MLA 連携の展開と課題レポート

2.1 学芸員資格課程における博物館情報・メディア論および司書資格課程における図書館基礎特論について

2.1.1 博物館情報・メディア論

従来の「博物館情報論」及び「視聴覚教育メディア論」は現在「博物館情報・メディア論」として学芸員資格課程における必修科目（2 単位）となっているが、主な内容としては：

「博物館における情報の意義と活用方法及び情報発信の課題等について理解し、博

物館の情報の提供と活用等に関する基礎的能力を養う」ことを趣旨として下記の内容から講義するものである。

1）博物館における情報・メディアの意義
2）博物館情報・メディアの理論
3）博物館における情報発信
4）博物館と知的財産

2.1.2　図書館基礎特論

必要2科目以上の選択科目の1科目として位置づけられ、「必修の各科目で学んだ内容を発展的に学習し、理解を深める観点から、基礎科目に関する領域の課題を選択し、講義や演習を行う」ことを趣旨とする。本学においては、文京キャンパスにおいて3－4年生に向けて開講し、1単位、7回程度の講義と課題レポートおよびその選抜プレゼンテーションの回からなる。

2.2　過去の講義実践

上記の2.1.1「博物館情報・メディア論」においては、主として、「2）博物館情報・メディアの理論」に相当する主題としてMLA連携を取り上げて、受講学生自身がその事例を探すことを目標に、以下の大学における科目と年次において講じてきた。

慶應義塾大学　2010－17年度　博物館情報・メディア論
　　文学部設置、主として美学美術史専攻学部生受講
東京大学　2015－18年度　図書館・博物館情報メディア論
　　教育学部設置、教育学部に限らず、多岐の学部にわたり、大学院生も加わって受講
青山学院大学　2018－19年度　ミュージアム情報・メディア論
　　総合文化政策学部設置、主として同学部生受講

他に、学習院大学人文科学研究科アーカイブズ学専攻（大学院）の情報資源論Ⅰでも MLA連携を取り上げている。

2.3　課題レポート「MLA連携の事例を探す」を通して探る学部学生の新たな調査研究メソッドとしてのMLA連携

本学での図書館基礎特論（2.1.2）および他大学での講義（2.2）においては、いずれも最終の課題レポートとして、「MLA連携の事例を探す」を課し、最終講義日に概ね8名程度の選抜プレゼンテーションを行ってきた。以下に、2018－19年度の課題発表の題目を記す。

2.3.1　ミュージアム情報・メディア論において―青山学院大学における実践課題事例（2019年度春学期）

青学2019_1　MLA連携と作品の再生―ドラクロワ《ライオン狩り》・モネ《睡蓮・

柳の反映》を例に
青学 2019_2　The GLAM-Wiki（Galleries, Libraries, Archives, Museums with Wikipedia）
青学 2019_3　V&A におけるキャメロン・コレクションを題材として
青学 2019_4　浜松市立中央図書館「浜松市文化遺産デジタルアーカイブ」
青学 2019_5　MLA 連携の実例―上村松園《人生の花》
青学 2019_6　モネ《積みわら》より
青学 2019_7　文化財修復から見る MLA 連携
青学 2019_8　地方の MLA 連携―みやざきデジタルミュージアムと西都原古墳群を例に
青学 2019_9　地方における MLA 連携の事例とその意義―秋田県立図書館デジタルアーカイブ

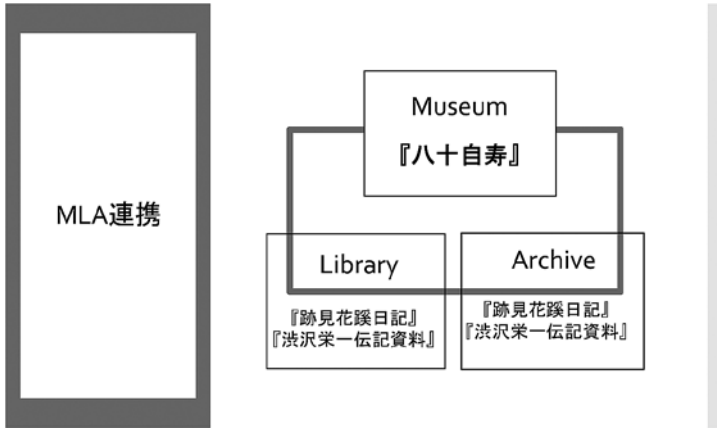
2.3.2　図書館基礎特論において―本学における実践課題事例（2018-2019 年度春学期）

選択1単位の本特論は上述の通り、「必修の各科目で学んだ内容を発展的に学習し、理解を深める観点から、基礎科目に関する領域の課題を選択し、講義や演習を行う」ものであり、現在の本務校での担当科目、特に「図書館概論」（必修）／「図書・図書館史」（選択）の発展内容として MLA 連携を取り上げて、上記出講校と同様に「MLA 連携の事例を探す」を最終レポートに課して、同様に最終講義回における選抜プレゼンテーションが下記の題目において発表されている。

本学 2018_1　MLA 連携“左右非対称ニワトリ剥製”
本学 2018_2　ビアトリクス・ポターの MLA 連携事例
本学 2018_3　跡見花蹊「八十自寿詩」をめぐる MLA 連携（図 8）
本学 2018_4　連携において起きた課題をどのように解決させたのか？―福井県文書館、福井県立図書館の連携について
本学 2018_5　作品を通した MLA のつながり：鏑木清方「たけくらべ」美登利
本学 2018_6　オフィーリアにおける MLA 連携
本学 2018_7　雑誌『婦人グラフ』表紙絵に見る MLA 連携
本学 2018_8　跡見学園女子大学百人一首コレクションから考える MLA 連携

本学 2019_1　書画家番付と跡見花蹊
本学 2019_2　重要文化財　義元左文字をめぐって
本学 2019_3　大隈重信の演説から MLA 連携を探す
本学 2019_4　身近から見つける MLA 連携
本学 2019_5　竹内栖鳳《観花》・千種掃雲スケッチ《髑髏》をめぐって
本学 2019_6　跡見花蹊と皇室　昭憲皇太后

図 8：事例　図書館基礎特論（2018）のプレゼンテーション・スライドから



本学 2019_7　故画　清花蹊女子冊頁
本学 2019_8　跡見花蹊における MLA 連携の諸相

2.3.3　課題レポート「MLA 連携の事例を探す」への反応と意見

この課題レポートの作成について、2018－19 年度の本学および青山学院大学での受講生の反応（「難易度」・「有効性」について）を、表 1 に報告し、また自由記述での感想もあわせて表 2－4 に紹介しておきたい[22]。

総じて、課題への取り組みの難易度は高かったという反応が大勢であるが、若干の受講期間途中での放棄学生を除けば、レポート提出には漏れはなく、MLA の連携の発見の途上において様々な事例に遭遇しつつ、最終の〆切日までには、いずれもその探索の過程が報告されている。

表 1：課題「MLA 連携の事例を探す」は？　その「難易度」と「有効性」について

課題「MLA の事例を探す」は？	跡見 2018｜春（31 回答）	%		跡見 2019｜春（25 回答）	%		青学 2019｜春（21 回答）	%	
とても易しかった	0	0		1	4.0		1	4.8	
易しかった	2	6.5		1	4.0		0	0	
普通	5	16.1		3	12.0		4	19.0	
難しかった	13	41.9	77.4	11	44.0	80.0	11	52.4	76.2
とても難しかった	11	35.5		9	36.0		5	23.8	
今後のレポート・卒論の作成に	跡見 2018｜春（31 回答）	%		跡見 2019｜春（25 回答）	%		青学 2019｜春（21 回答）	%	
役立たない	3	9.7		2	8.0		0	0	
役立つ	13	41.9	45.2	15	60.0	68.0	14	66.7	81.0
とても役立つ	1	3.2		2	8.0		3	14.3	
どちらとも言えない	14	45.2		6	24.0		4	19.0	

表 2：青山学院大学　2019 年度春学期　自由記述

■自分としては今回の課題は結構くわしく調べたかもと思ったが、他の人のプレゼンを見て参考になることがあったし、改善点もたくさんあったので今後のレポートの作成に是非役立てたいと思う。 ■アーカイブが論文やレポートを作成する際に重要な役割を果たすことが分かった。アーカイブを見つけ、連携の形を捉えることで論文やレポートのテーマを深めることになると思う。 ■現在の MLA 連携は、その成果がまだ内側にばかり還元されているというか、研究成果への反映という面が大部分を占めると思います。それらの連携が、外部へ向けて、つまり一般大衆が享受できるように、どのように活かされていくか考えるべきだと思いました。 ■これまで、MLA を単体ずつでしか意識してこなかったけれど、その 3 つが連携することの大切さを学びました。それによって一度壊れたものはもう二度と元に戻せないという概念はなくなり、貴重なものを次世代へと残していくのに連携は必要不可欠であると感じました。

表 3：本学　2018 年度春学期　自由記述

■〈MLA 連携〉は作品が出来上がるまでにどのような経緯があったのかについて注目することで、芸術への関心が高まるものだと思いました。 ■一つの絵などだけからは分からないことが、本や他の資料により、より理解を深められ、新たな発見ができることが分かった。 ■作品と本、手紙などそれぞれの機関に所蔵しているものは、一見別々のものと思われがちですが、事例を調べると具体的なつながりや関連性が見えてくるので、対象物を探し出すうえで、効率的で、調査方法に適していると考えます。 ■〈MLA 連携〉の事例を探すという体験自体がとても楽しかった。

表 4：本学　2019 年度春学期　自由記述

■研究する際に“裏づけ”＝証拠となるようなものがあれば、その研究は信憑性が増すことでしょうし、そこから違った見方ができてさらに発見することができるのではないだろうかと思うのです。 ■ MLA 連携を用いることでその事例の見解がさらに深まると思いました。1 つのテーマについて考察するときその背景を知るのに役立つと考えました。また、関連しているものを見つけることで新たな情報を発見することができる可能性があると思います。 ■ L と A の違いが少し分かりづらくて、最初説明を聞いた時は、集める資料のイメージがつきにくかった。 ■ MLA 連携というのは、もともとなくって自分が身近のものから探し、作り上げていくことができると思いました。今後は視野を広げていくことで、いろいろな連携が見つかりそうです。

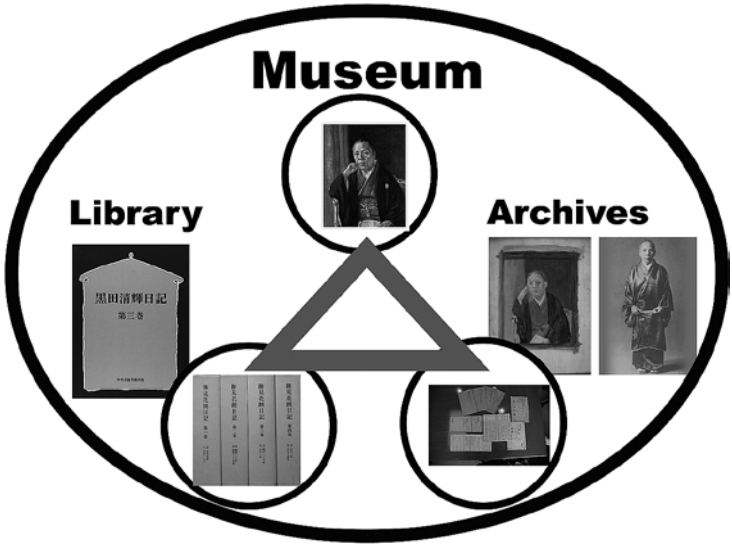
2.4　跡見花蹊に関わる MLA 連携の発見の試み

本学の学祖である跡見花蹊の作品や関連資料を保管する花蹊記念資料館は、花蹊のミュージアムであり、アーカイブであると見ることができる。花蹊に関する刊本ならびに関連諸作を有する大学図書館と連携することをもって、大学内にある MLA

の連携を探す、すなわち大学の中の〈内なる〉連携（インナー・トライアングル（Inner Triangle）（図4））、ミハルコ流に言うならば「同一の屋根の下（under the same roof）」のMLAのトライアングル（図7）の探索可能性を模索する課題を司書資格課程の科目、特に選択科目であり、講義展開に自由度を持ちうる図書館基礎特論にビルト・インすることによって、当該科目を、MLA連携による学部学生の新たなリサーチ・メソッドの開発に展開する試みとして位置づけてきた。

その一例として、跡見花蹊の肖像画を描いた、岸田劉生よりも先に日本近代洋画の先達として多くの業績を残した黒田清輝と花蹊との関わりの中にMLA連携を見出し、この肖像画を巡って、本学の『跡見花蹊日記』がPDFで公開されているデジタルコンテンツ[23]、および黒田自身が創立した美術研究所の後身である東京文化財研究所の黒田清輝日記のデジタルコンテンツ[24]を、つまりM（《跡見花蹊像》）・L（刊本の『跡見花蹊日記』『黒田清輝日記』）・A（2人の日記の全文テキスト）を連携させることによって、その肖像画の描かれた契機や当時の二人の取り巻く環境や思いを汲み取ることが可能であることを、筆者から参考事例・サンプルの1つとして提示して、その他の関係諸論考ともあわせて補強しつつ、受講学生による「MLA連携の事例を探す」課題への取組みへと誘導している（図9）。

図9：事例　《花蹊肖像》をめぐるMLA連携のトライアングル・イメージ



この課題自体は、上述の通り、本学に異動する以前から、慶應義塾大学や東京大学などでの筆者の講義の受講生に課してきたものであり、いずれのクラスでも、初めは手強い課題のように受け取られはするが、学期末には、ほとんど全ての学生が何ならかの「MLA連携の事例」を見つけてくるものであることは、確信されていた。

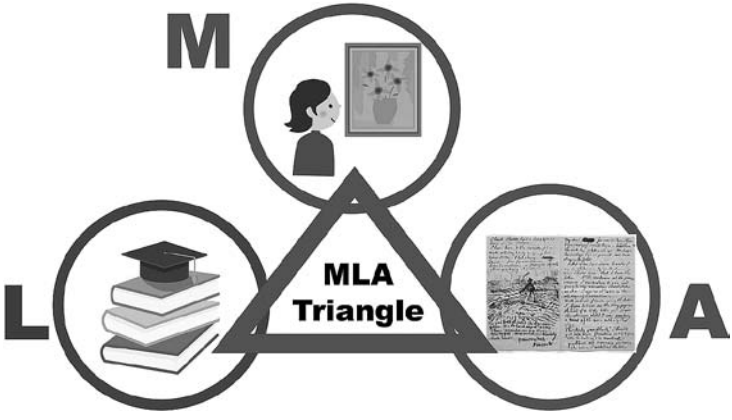
2019 年度は本学における初年度の経験を踏まえ、より本学内での MLA 連携の可能性を、花蹊資料について折にふれて、図書館基礎特論の講義に織り込むことによって、上記「2.3.2 図書館基礎特論において―本学における実践事例（2018－2019 年度春学期）」の通り、花蹊をめぐる MLA 連携の事例探索とその報告が、目に見えて増えていったのである。

3. MLA 連携の拡張：一般・敷衍化としての SLA 連携への展開の試み

MLA 連携の事例の探索から新しい知見を発見することは、研究者の道に入った大学院生から以後の研究者にとっては、メソッドなどという意識すらも醸さないほどに一般的な手法であり、手続きなのだと思われる。

けれども、初学者の手前である大学学部の 3-4 年次生には、そもそも MLA の体験、とりわけアーカイブを実見し、触る機会のなかったこと、これは M と L に比して A における資料公開の未成熟と貧弱さが現実において顕著にあるのだが、それ故のアクセスの困難さを乗り越えて、課題遂行するプロセスの様子を見るについて、やはり新たなリサーチ・メソッドとしての MLA 連携の可能性のあることは、2010 年以来の諸講義での体験から感得されてきた（図 10）。

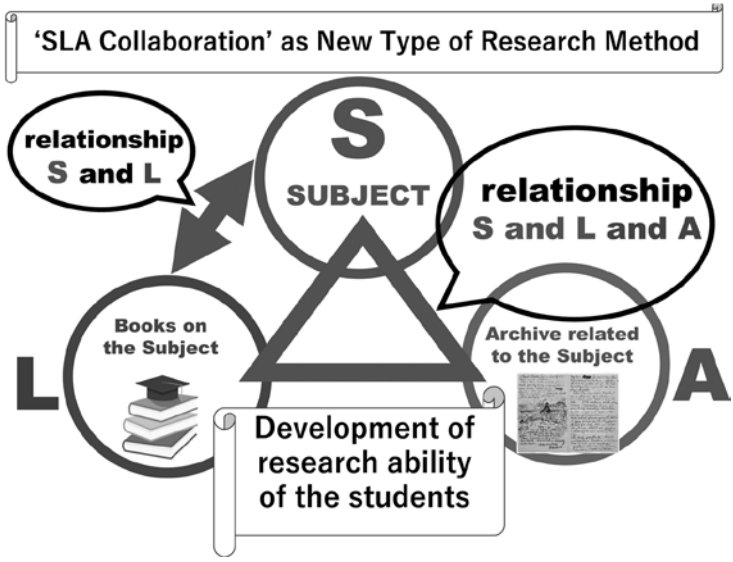
図 10：MLA のトライアングル・イメージ



MLA 連携の原理的図式として

そして更に言えば、連携模様の理解の初手として M を用いつつも、探求の対象の始まりとしての主題（サブジェクト）そのものに一般・敷衍化すること、つまり Museum からより拡張して、探求の対象としての「主題」、すなわち「S: Subject」そのものと L: Library, A: Archive との連携、すなわち、SLA 連携という、探求主題とライブラリとアーカイブのトライアングルへと拡張することの可能性と意義を、以後、より精緻化して提案できることを目指している（図 11）。

図 11：SLA のトライアングル・イメージ



S-L の二項関係から S-L-A の三項関係への展開を促す

4. おわりに― SLA 連携への展望と期待

上述の通り、MLA 連携から SLA 連携への一般・敷衍化への展望を持つに至っているのであるが、しかしながら、講義の受講に引き続く課題遂行の過程にあって、多くの学生が抱えていた A: Archive へのアクセスの困難、さらに言えばそもそものその存在の発見の手がかりにおいて立ち現れる障壁等は、なお依然当分の間、続くことであろう。

MLA の連携の要には 1988 年にレムケ教授が指摘していたように〔アート・〕アーカイブがあることは、あらためて重要である。

M-L、あるいは S-L の二項関係から〔のみ〕では、M および S に関わる先行・既述の文献著作をなぞるばかりで終えてしまう〔可能性が高い〕。

M-L、あるいは S-L に加えての第三の項として A を、この 2 つの項に架橋することによって、結果、それが極くわずかの、いささかのものであったとしても新知見を生み出す可能性を孕むだろうことを考え、また期待している。

【付記】

本稿の目指したところは、「MLA 連携〔論〕は学部学生の新たな調査研究メソッドになるだろうか？」の肯定的提示を第一義としているが、本稿は「MLA 連携論を素地とする調査研究メソッドの可能性の検証と開発及び跡見花蹊史資料の MLA 連携横断のための試行的システムに向けた予備

的調査」を題目として、2019年度に跡見学園女子大学の特別研究助成費の交付を受けての研究課題の成果の一部である。

注

(1)　無記名「MLA 連携」日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編，丸善出版，2013，p.20.

(2)　IFLA: International Federation of Library Associations and Institutions, 国際図書館連盟。当該報告書の翻訳：アレクサンドラ・ヤロウ、バーバラ・クラブ、ジェニファー　リン・ドレイパー著，垣口弥生子、川崎良孝訳『公立図書館・文書館・博物館：協同と協力の動向』（KSPシリーズ7），京都大学図書館情報学研究会，2008，68p.
http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/~lib-sci/pdf/IFLA-Profrep108-Jp.pdf［参照日 2020.1.6］
http://www.ifla.org/VII/s8/pub/Profrep108-jp.pdf［参照日 2020.1.6］
以下、特に記さない場合の URL の参照日は 2020 年 1 月 6 日である。

(3)　OCLC: Online Computer Library Center, 世界最大の書誌ユーティリティであり、WorldCat, https://www.worldcat.org の運営体。
Zorich, Diane, Gunter Waibel and Ricky Erway. *Beyond the Silos of the LAMs: Collaboration Among Libraries, Archives and Museums*. Report produced by OCLC Programs and Research, 2008.
http://www.oclc.org/programs/publications/reports/2008-05.pdf

(4)　「博物館情報学シリーズ」は樹村房による全8巻（予定）、既巻3巻。水嶋，該当書，p.11, 13.

(5)　http://www.jsas.info/

(6)　http://digitalarchivejapan.org/

(7)　https://savemlak.jp/

(8)　Lemke, A. B. “Art archives: a common concern of archivists, librarians and Museum Professionals”,. *Art Libraries Journal*, 1989, vol.14, no.2, p.5-11.

(9)　このテキストは後日に大きく改訂されて、“Archives”, *The Dictionary of Art*, vol.1. Macmillan Pub., 1996. に収録。その翻訳（水谷，中村節子共訳）「アート・アーカイヴ」は、『アート・ドキュメンテーション研究』no.4，1995 および『情報管理』vol.39，no.2，1996 に全文掲載。

(10)　水谷「アメリカにおける美術図書館の現状と課題―その歴史・組織・戦略」『現代の図書館』，vol.28，no.4，1990，p.205-215.

(11)　1996 年に展覧会「岸田劉生　所蔵作品と資料の展示」を開き、その目録は、『東京国立近代美術館所蔵作品目録 岸田劉生作品と資料：*Catalogue of Collections, The National Museum of Modern Art, Tokyo: Ryusei Kishida Works and Archives*』という英語タイトルを持った。これは日本で *Archives* という語を持ったミュージアムの所蔵作品目録の嚆矢である。

(12)　「美術資料をめぐる〈外なる／内なる〉ネットワークを考える」『現代の図書館』，vol.34, no.3，1996，p.151-154.

(13)　1994，2009 における MLA 連携のシンポジウムは鼎談の形式で進行、司会筆者。両シンポジウムの記録については、注(17)に詳述。

(14)　https://www.europeana.eu/portal/en

(15)　https://dp.la/

(16)　https://jpsearch.go.jp/

(17)　1990 シンポジウムの記録：
『美術情報と図書館 報告書』アート・ドキュメンテーション研究会，1995，188p.
鼎談会記録「ミュージアム・ライブラリ・アーカイヴをつなぐものーアート・ドキュメンテー

ションからの模索と展望」，p.90-121.

2009 シンポジウムの記録：

水谷編『MLA 連携の現状・課題・将来』勉誠出版，2010，296p. 鼎談会記録「記念鼎談―これからの MLA 連携に向けて」，p.1-37.

『MLA 連携の現状・課題・将来』を扱った書評掲載誌：

1］岡野裕行（皇學館大学）「書評」『図書館界』vol.63，no.1，2011，p.40-41.

2］古賀崇（天理大学）「書評」『日本図書館情報学会誌』vol.57，no.1，2011，p.35-36.

3］寺澤正直（国立公文書館）「書評」『レコード・マネジメント』no.59，2011，p.44-46.

(18) 水谷「書評」『日本図書館情報学会誌』vol.57，no.4，2011，p.163-165.

(19) 水谷〈研究文献レビュー〉「MLA 連携―アート・ドキュメンテーションからのアプローチ」『カレントアウェアネス』no.308，CA1749，2011，p.20-26.
https://current.ndl.go.jp/ca1749

(20) 水谷「MLA 連携のフィロソフィー：“連続と侵犯”という」『情報の科学と技術』vol.61，no.6，2011，p.216-221.

水谷「極私的 MLA 連携論変遷史試稿」『美術フォーラム』醍醐書房，vol.35，2017，p.127-134.

(21) 水谷「MLA 連携は学部学生の新たな調査研究手法になるだろうか？」アート・ドキュメンテーション学会／ 2018 年度第 11 回秋季研究集会（2018 年 10 月 13 日　於お茶の水女子大学共通講義棟 1 号館）

水谷「大学ブランディング力と学部学生の調査研究力の向上は両立するだろうか⁉―花蹊コンテンツの「見える」化の可能性をめぐって」本学文学部 FD-WS（2019 年 6 月 19 日　新座キャンパス 2 号館）

水谷，“From ‘MLA Collaboration’ proposed by the Library & Archives of the National Museum of Modern Art, Tokyo to ‘MLA Collaboration’ as the New Type of the Research Method for Education in University”, 2019.12.5, Lee Ungno Museum, Daejeon, Korea, International Symposium: Museum・Human・Future.

「大学の教育現場で提案する新たなリサーチ・メソッドとしての〈MLA 連携〉」に関わって、これまで振り返られることはほぼ皆無であったのだが、先行事例として次の文献を挙げておきたい。この編著者は当時、武蔵野美術大学美術資料図書館の事務長を勤められていた。

大久保逸雄編著『私のアート・ドキュメンテーション：東洋大学 社会学部 応用社会学科 図書館学専攻 図書館学特講 V-② 91 年度レポート集』東洋大学図書館学研究室，1992.6，163p.

(22) 自由記述を含め、アンケート用紙には下記の文言を紙末に添えている。

「以上の回答は、今後の講師の授業改善および研究成果の公表に活用させていただきます。個人を特定できる情報の掲載は、いずれにおいても控えますので、ご自由にお書きください。もちろん履修科目の成績に反映されることもありません。念のため。」

(23) http://www.atomi.ac.jp/univ/kakei/

(24) https://www.tobunken.go.jp/materials/kuroda_diary